



機関紙

一水会

No.2

発行日/2014年5月1日
発行人/小川 游
編集責任者/さきやあきら
発行/一水会事務局
〒330-0074
埼玉県さいたま市浦和区
北浦和5-3-3 B-108
山本耕造方
Tel.048(816)8805
<http://www.issuikai.org/>

巻頭言

機関紙『一水会』第二号(春号)の発行に向けてのとりくみが、既に着々と進行中とのこと、担当各位の熱意に対し心より敬意を表します。

昨秋の創刊号は、会代表を務める私個人の特集の観があり、たじたじとはしましたが、反面、役割の幾分かを果たし得たような安堵の想いもあり、この場をお借りして感謝申し上げます。有難うございました。そして、第二号の中身が一層充実したものであることを大いに期待しております。

聞くところによれば、次号の方針として、精鋭展の状況を大きくとりあげて掲載し、複数の長老宅への訪問・インタビューの頁、更には、故・深沢紅子先生の生誕百十周年にちなんで、先生の郷里、盛岡で開催された記念行事の紹介等々、中々興味深い紙面が企画されているそうで、手許に届くのを、今から心待ちにしています。

特に、精鋭展についての頁は、編集の柱として、今後も出来る限り存続させてほしいものと思います。又、

会に在籍する作家の注目すべき活動や、物故作家の遺作回顧展等の取材にも是非力を入れて、その紹介をしてもらえれば有難いことです。

ともあれ、この機関紙『一水会』がふみ出した第一歩は、会の活力を引き出すための、貴重な試みであり、これによって生じる波紋と連鎖の輪が次第に大きく成長することを切に願ってやみません。

二〇一四年春 小川 游



ごあいさつ

事務局長 山本 耕造

日頃より皆様が会の運営に對しご理解くださり、多くの方がご協力の手を差し伸べてくださることに大変感謝しております。数々の行事が円滑に運びますよう事務局一同力を合わせて努力してまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

一水会では年間を通して様々な取り組みをしております。次に二〇一四年の展覧会スケジュールを紹介致します。

■第五十三回 選抜展

二月二十六日～三月四日

於/日本橋三越

(本紙三面に関連記事)

■盛岡展

三月二十八日～四月十日

於/深沢紅子野の花美術館

日本橋三越で開催された

「第五十三回選抜展」より、

運営委員、常任委員に加え

会場で選抜された七点の作品が岩手県盛岡市の深沢紅子野の花美術館に巡回しました。中津川のほとりに佇む深沢紅子先生ゆかりの可愛い美術館は、岩手県はもとより全国的に有名な美術館です。

■第十一回 一水会精鋭展

三月十日～十六日

於/東京銀座画廊・美術館

(本紙八～十面に関連記事)

■公募団体ベストセレクション美術二〇一四

五月四日～二十七日

於/東京都美術館

東京都美術館主催で開催される、全国の美術公募団体から選抜された二十七団体による合同展覧会です。三回目となる今年は、一水会を代表して田中義昭先生、武藤初雄先生、浅見文紀先生、宇野のり子先生が出品されます。他団体の精鋭と並ぶ貴重な展覧会です。是非、会場に足を運び、ご覧下さい。



第75回記念 一水会展 「ギャラリー・トーク」シーン

深沢紅子先生 生誕一一〇年

野の花のように

：しなやかに強く

二〇一三年十月三十日、「深沢紅子野の花美術館」がある盛岡市内のホテルで「深沢紅子生誕一一〇年祝賀の会」が開かれました。

当日は岩手県知事を始め、政財界から美術館を支える母校や市民の方まで大勢の方が出席し、没後二十年経った今でも深沢先生が多くの方々に親しまれている様子が伺えました。

祝賀会に先立って、深沢先生のご長男の深沢龍一氏による記念講演会『母紅子を語る』が開かれました。その中では、絵の勉強のために一人東京に出て来た頃のエピソードや、一九七九年七十七歳の時に隣家からの類焼で自宅が全焼し、それまでに描きためた作品の多くが消失した時に「燃えてしまった絵は残さなくてもいい絵だった。」と語った話を紹介し、紅子先生の気丈な様子を伝えていきます。

深沢紅子先生は一九〇三年三月に盛岡に生まれました。一九一九年、東京女子美術学校(現在の女子美術大学)に入学し、岡田



三郎助に師事しています。一九二五年、第十二回二科展に「花」の台の上の花を初出品し女性でただ一人の入選でした。

二十二年の時です。一九三六年有島生馬、安井曾太郎、山下新太郎などが二科展を脱退して一水会を創立するのに伴って第一回展から一水会展に出品しています。一九四一年には第五回一水会展にて「スカートの女」が一水会賞を受賞。一九四九年には「かんぞうをもてる少女」で会員優賞を受賞。一九五二年に一水会常任委員に推されています。当時は女性で絵を描く人も少ない時代で、戦中、戦後と五人の子供を育てながら絵を描き続ける事は大変な事だったと想像できます。同郷の画家である夫深沢省三先生は鈴木三重吉主宰の児童文芸雑誌『赤い鳥』の挿絵を描き続けた方でした。紅子先生

も堀辰雄や立原道造など詩人達との交流も深く、詩集の挿絵や装丁なども手がけています。その事が縁となり堀辰雄の没後に軽井沢の堀の別荘を借り夏の間はここで多くの作品を制作しています。

生誕一一〇年の企画として同美術館では「盛岡の先人 深沢紅子展」が開催されました。深沢先生は女性像を多く描かれています。多くの絵が野の花をテーマにしています。十代の水彩画から九十歳で亡くなる直前の絵を一堂に並べてあり、描かれた年代と共に年齢が書かれていました。展示されていた子供

の時のツクサの写生が野の花をこよなく愛した後の深沢先生を象徴していました。二十代には後の画風がもう現われていた事など、画風の変遷とともに、一人の画家が歩んで来た様子が良くわかる展覧会でした。

生誕一一〇年を記念して出版された深沢先生の言葉と絵『野の花に寄せて』のあとがきに書かれている紅子先生四十九歳の時の言葉を紹介させて頂きます。『美は感覚である、美を知ること、は、なかなかむずかしい。教えることもまたむずかしい。けれども、美の感覚がすべての根本になっいて、人間の純粋な精

神も、高邁な知恵も育てられるものだとい気がついたなら、すべての人が真剣に取り組みたいものである。』

盛岡の「深沢紅子野の花美術館」では二〇〇四年から毎年三越日本橋本店「一水会選抜展」の巡回展が開かれています。美術館は中津川のほとりにあり、秋には鮭が産卵のために勇壮に川を登る様子が見られ、春の川原には忘れな草が咲きます。「深沢紅子野の花美術館」は盛岡の他に軽井沢にもあります。機会がありましたら女流画家の先人の絵に触れてみてはいかがでしょうか。

(西記)



「スカートの女」 F15 第5回一水会展 一水会賞

第53回 一水会選抜展 盛岡展

2014年3月28日(金)~4月10日(金)

深沢紅子野の花美術館 盛岡

〒020-0885 盛岡市紺屋町4-8

☎019-625-6541

深沢紅子野の花美術館 軽井沢

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢湖217

☎0267-45-3662

新たな展望

第53回

一水会選抜展



二月二十六日から三月四日まで日本橋三越本店六階の美術特選画廊にて第五十三回一水会選抜展が開催されました。今年の出品は六十四名でした。運営委員、常任委員の先生方は十号程度と三号程度の二点出品、その他の選抜者は十号程度一点の出品で、出品総数は九十八点でした。

三月一日の午後二時からにはギャラリートークがあり、小川游、池田清明の両先生が担当されました。約一時間、百名余りのお客様の前に絵の解説やその作者の紹介がありました。また、会場に居あわせた出品者による制作方法や制作への思いなども語られて、終始和やかに行われました。

最終日の四時半からは日本橋三越七階の特別食堂で打ち上げがあり、三十四名の参加で親交を深めました。



芥子園研究会に対する一水会の見解と、朝日新聞社への対応について (運営委員会より)

私たちは昨年十二月五日の臨時運営委員会での話し合いの結果次のような結論を得ましたので、ここに再確認させていただきます。

経過

ご存知の方も多いかと思いますが、一水会から日展に出品している方々は、毎年夏と秋に希望者の作品を一堂に持ち寄り、『日展に応募する作品の研究会(一水会研究会)』を自主的に開いています。これは、一水会が会として企画する研究会ではなく、日展出品者たちが自主的に開催してきた取り組みです。

ところが、昨年十一月二十日付けの『朝日新聞』朝刊の中に、あたかも本会が企画しているかのような表現で、しかも指導に当たる者が金銭的な利益を得ていると誤解されかねない報道がありました。一水会運営委員会はこの事態に際し、速やかに臨時の運営委員会を開き、関係者からの詳しい事情の聞き取りと実際の会計処理など、できる限りの正確な情報を集めて検討し

て参りました。その結果として『芥子園研究会』では、審査権を利用しての不正な事実はなくないことが確認されました。従って運営委員会は、朝日新聞のこの件での報道は読者に重大な誤解を招きかねず遺憾であると判断し、これにたいして以下のような態度で臨むことを確認致しました。

① 運営委員会は、一水会関係の日展出品者たちが毎年会費を出し合って開いている、『芥子園研究会』の取り組みを、勉強会として全く正当で意義のある取り組みであるとして判断し、何ら不当視されるものでないことを確認する。

② 十一月二十日付けの『朝日新聞』朝刊にあつた記事の中に本会に対して誤解を招く恐れのある報道があつたことはまことに遺憾であるが、これはあまりにもずさんな取材による記事であり、『無視』することとする。

③ 今後、朝日新聞紙上に再び一水会への云われなき中傷とも取れる記事が掲載されるような場合は、本会は断固とした立場で対応する。

二〇一三年十二月五日

一水会臨時運営委員会

寺井力三郎先生 大いに語る



二〇一三年九月二十八日より二〇一四年二月二十三日まで埼玉県加須市のサトエ記念21世紀美術館にて寺井力三郎先生の大個展が開催されました。十月二十日のミュージアムトークでは、大雨にも拘らず詰め掛けの百人を超える聴衆を前に約一時間、寺井先生の歩んで来られた道のりと現在のご心境を、軽妙に優しくそして時に強さも交えて熱く語られました。紙面の都合上、ここでは「言葉抄」として皆様にお届けします。

「寺井力三郎展」静謐なる日常の彼方に」の会期中に催されたミュージアムトーク「寺井力三郎、自作と人生を大いに語る」より

僕は昭和五年（一九三〇年）生まれです。から八十三にもなっちゃったんですよ。十八で絵を始めましたからもう六十年以上になるのかなあ。東京の上野桜木という所で生まれました。私の家の二階から芸大、昔は東京美術学校建築科の立派な建物が見えていてあの学校で学ぶことになるなんて夢にも考えてなかったんだけど、これは何か因縁めいているとか、運命かなあなどと最近思っております。

少年時代は全く戦争の真っ只中でね。絵が好きでした。中学校で中間考査とか本試験が終わると家へ帰って藁半紙にやたらに絵を描きましたよ。全くの軍国少年で飛行機・軍艦そういうものが大好きでね。今だって上手いですよ飛行機描かせたら。

その頃（昭和十八年）家族はみんな羽生に疎開してまして私と親父だけ上野桜木町に残ってね。一番強烈に覚えているのはなんだったって昭和二十年のあの凄く空襲ですよ。あの時上野にいましたから。B29が人を小馬鹿にしたように低い所を飛んで行って、下で燃えている火が羽根に反射してキラキラピンク色に光ってうわーって頭の上を飛んで行ったのを覚えています。焼夷弾をパラパラ落として辺りがピンク色で明るくなっちゃって。翌朝上野の山から見

るともう焼け野原で何もありません。浅草の方まで丸見えだったですからね。

或る日ガラクタだの焼けた機械なんかを片付けていたら小さい飛行機がぐーっと来て頭の上をぐるぐる回るんですね。風防を開けて手を振るんですよ。低い所を飛んでいて、あれは「隼」っていう飛行機ですよ。「この辺に住んでた人が見に来たんだよ。別れをしに来たんじゃないか？」というのが皆の意見でした。名残惜しそうにぐるぐる飛んで西の方へ消えて行きました。おそらくもうあの人は生きちゃいない、特攻でしょう。

絵描きさんも明治の人、大家は多いんですよ。だけど大正は少ない。特攻だとか一番激しいところに回されたりして。昭和になると命拾いした人は多いですけど大正の人は気の毒です。

戦争が終わりましたもう堰を切ったように、今まで知らなかったルノアール、セザンヌ、ゴッホが入ってきて、西洋の文化というのはこういうものだったって解ったですよ。それで、そうだ！俺は絵が好きなんだって思ってた絵描きになろうと決心したわけ。自分の好きなものをやった方がいいと思ってる。それで親父に相談したんですよ。うちの親父は趣味人で俳句をやったり

お茶やったり多彩でね。倅が絵描きになるって言ったら「おお！いいじゃないか」って応援してくれましてね。今日あるのは親父の力が随分あると思います。

美術学校受けたんですけど、急に思い付いて受けたって大変な競争率ですから落ちちゃって、次の年に旧制から新制に切り替わって一年募集しないんですよ。一年間我慢して次の二十四年にはどうにか入れました。

入ったら上手い奴いっぱいいるから随分勉強しました。人体は絵の基本で徹底的にやらされました。当時の美術学校の先生ってのは超大家がごろごろいてね、安井會太郎でしょ、梅原龍三郎でしょ、碓伊之助、伊藤廉……。碓先生はこわい先生でね、一年生は石膏デッサンやらされるんですよ。白い像の一番暗い所から明るい所まで沢山段階があるんだけど、それを正確に置いていくという訓練ですよ。それと形が非常にきれいで美しくて端正ですからギリシャ彫刻の石膏像デッサンを一年間みっちりやらされました。しごかれましたけどね。

二年生になると今度は安井會太郎で、安井先生は穏やかで人格者なんだけどじーっと見られると震え上がっちゃうような鋭い眼してましたよ。やっぱり白から黒まで沢

山段階があるけど、絵の具になっても白から黒まで色んな黄、赤、緑。明るさの段階があるわけですよ。それを正確に描くということ。色。石膏デッサンで言う調子ね。それは「ヴァルール」と言うんです。フランス語で「価値」っていう意味なんですけど。価値っていうのは「その場で一番価値を発揮する」という意味ですね。ヴァルールにはうるさかったですね。

安井先生も六十になつてたからもう辞めたいと言われて林武先生がやって来たんですよ。林先生はまあ安井先生と違って「現代絵画には影が無い。お前たち、影を描くな」って言われちゃってね。今まで安井先生は「形を正確に。影も間違いなく描け」って言うたのに影は描くなつて言つたつて、影はあるのに描かないって解んなくなっちゃって、四、五年絵が描けなかつたですよ。どうしたら形を、影を描かないで出来るんだろうって思ってた。

ちよっと話は前後しますが、芸大を受ける時に僕が行った高校の先生が芸大受けるんだつたら俺が安井先生の所へ連れて行ってやる。お前に絵の才能があるかどうか見てもええ。親父もつれて来い。って言うんで親父さん連れて教会の絵持って行ったら「良いだろう。この絵の左右の森の色

はもう少し変えた方が良いんじゃないか?」
 っ。絵の裏に炭で書いてありますよ」左右
 の森注意」っ。安井先生親父の方向い
 て「美術学校受けるのは良いでしょう。だ
 けどもし入って出てから、お父さんはこの
 息子さんをしばらくの間面倒を見てあげら
 れますか?とにかく絵描きっていうのは食
 えないんだ。だから面倒見ないと当分駄目
 ですよ。」っ。言われちゃっ。はい。」
 っ。言っ。親父は学校出
 から随分助けてくれました。浦和にささや
 かなアトリ工作っ。くれたり、本当に感謝
 しております。

——貧乏な生活してましたけど三十代だっ
 たかな?辛かったです。自分が何だか解ら
 ないしどう描いていいか解らない。その頃
 結婚してね。女房良く我慢してくれてる
 と思いますけど、親父は病気になる絵は出来
 ないお金は入ってこない。よっぽど絵描き
 やめて永平寺行っ。坊さんになっ。ちやおう
 かなと思っ。たりしてね。だから三十代の絵
 あまり無いです。親父が亡くなり色々悩ん
 だけど解っ。て来たこともあっ。てね。抽象は
 向かない、具象の絵描きなんだっ。ていうこ
 とが自分の性格から判っ。て来た。

——安井・梅原の時代でね。安井先生はど
 っちかという青だな、知的な絵を描く人
 ですよ。梅原龍三郎先生は赤い絵で感覚派
 ですよ。人っ。ていうのは大体的な人と
 感覚的な人とに分かれるのではないかと思
 うんだけど、僕は間違いない安井先生。セ
 ザン又は青ですよ、ルノアールは赤で。
 青と赤ですよ、暖かいのと冷たいの。あ

そこにアングルの絵がありますけど(アン
 ル礼讚一九七三作)僕はアングル大好きな
 んですよ。アングルは間違いない理知派、
 形の絵描きです。

——ヨーロッパへ行きましたよ。中近東の
 国から行っ。てやっ。と辿り着いてナポリから
 ずーっ。と北のミラノまで行きました。そこ
 でまあ凄い、みんなとてもじゃないけど神
 様が描いたんじゃないかと思うような良い
 絵をね、ダ・ビンチ、ボッティチェリ:な
 んて凄いだらう到底描けないやと思っ。て
 いましたけどね。建物もローマのヴァチカ
 ンなんてもの凄。西洋っ。ていうのは石の文明
 ですよ。我々の

東洋、日本は木
 と紙との文明み
 たいですよ。ね。
 風通しがいい
 ですよ日本の文
 化はね。ところ
 が向こうは自然
 と対峙してとい
 うか大風が来
 てもびくともし
 ないような凄
 い建物ですよ。絵
 もしつこいぐら
 い良く描いてあ
 る、真似が出来
 ない。これはと
 ても敵わん、全
 然文化が違うん
 だと思っ。ました

ね。キリストがはりつけになって血が垂れ
 ているような絵はもう我々は見られない
 ですよ、どぎついのは。ああいうの平気
 だし狩猟民族なんですね。我々は農耕民族
 だからもつと穏やかで、文明が文化が全
 違うんじゃないかっ。ていう気がしました。
 と言っ。てね、負けてるわけじゃないんです。
 僕が学生の時に東京国立博物館の表慶館に
 マチス展が来た時にね、本館の方で俵屋宗
 達と尾形光琳の展覧会やっ。てたんですよ。
 凄。い!宗達と光琳は。マチスが可哀想でし
 たよ、凄。いので宗達光琳が。日本の絵画は
 負けていないというのがその時はっきり判
 りましたね。凄



廻送列車 P50 1994年作

いす日本の絵
 の歴史は、古い
 ものは。僕は日
 本の絵で一番好
 きなのは神護寺
 にあるんですけ
 ど源頼朝と平重
 盛ともう一人、
 三つ所蔵されて
 いて国宝になっ
 ているんですけど
 僕は頼朝が好き
 でね。理想です
 頼朝の絵は。西
 洋ではアングル
 それからフェル
 メール。あれは
 凄。いですフェル
 メール、今でも
 古くないですよ。それからゴッホね。ゴ
 ッホというところよつと乱暴でいい加減みた
 いに見えるけどとんでもない。あれはさっ
 き言っ。たヴァルメールが実に正確、正確無比
 ですよ。それは白黒写真で見るとよく分
 かるんだけど、本当に静かで良い絵ですよ
 ね。伊藤廉先生が言っ。てましたけど「良い
 絵っ。ていうのは水を打っ。たように静かでな
 ければならない」っ。て。いうことはヴァル
 メールが正確だから絵が騒がしくない、水を
 打っ。たように静か。そういう意味なんです
 よね。あの頃林先生はモディリアニが好き
 でね、モディリアニとピュッフェか。ピュ
 ッフェをよく例にしてましたね。僕はピュ
 ッフェはあまり好きじゃなかったけれど、
 「影を描くな」っ。ていうことが段々解っ。て来
 た。「絵画っ。ていうのは形が大事である」そ
 ういうことを言っ。たかっ。たんだと思っ。て
 す。今になるとよく解るんです。だから今
 考えると安井先生も林先生も小磯先生も皆
 同じことを言っ。てただけでそれぞれ表現
 の仕方が違いますよ。それだけの話で、
 僕は色々な先生に教わっ。て本当に良かった
 と思っ。て、財産ですこれは。
 ——ヨーロッパから帰っ。てきてやはり日本
 人の油絵を描くべきだというように思っ。ま
 してね。日本にいて羽生にいてヨーロッパを
 描くなんてちよつとおかしいんじゃないか
 と思っ。うんですよ。やっ。ぱり自分の住んでい
 る所を描くべきだと思っ。てね。毎日夕方散
 歩に行く東武線の貨物列車が夕日をバッ
 クにして、これは絵になると思っ。てあれ(廻
 送列車一九九四作)描きました。探すと色ん

なモチーフがあるんですよ。二三年前にだけ子供が共同便所でスポンを下げておしっこしてるんですよ。そしたら小っちゃいお尻が見えて可愛いんですよ。あれ絵に描いたら売れましたよ(笑)。何だかって感動して描けば良い絵出来るんだと僕は思うんですよ。一水会展なんかで毎年同じような絵が多くてね、感動しているならいいんですけどいつも同じような絵描いてよく飽きないなと思いますけど僕は一枚描くと次は同じもの描きたくない。いつもモチーフを探してますけどね。

——アメリカでポップアートってというのがあったの知っていますか？ポップアートってというのは自分の身近にあるものを題材にするんです。例えばコーラの壘とかね、機関車とか車とかネオンサインとか。今現在自分の身近にあるものを題材として描く一派なんですよ。僕はあれに非常に感動しました。僕は機関車大好き飛行機大好き車大好き。ああいうもの描くと怒られちゃうんじゃないかとか笑われちゃうんじゃないかかと思つて我慢してたんですよ。ところがアメリカ人がそれをやり出してしまった。よし俺もやってみようってんでジャンボ機描いてね、へへっ。描いていて良かったと思うんだ好きなんだから。



好きなもの描くべきですよ。ポップアートの影響ありますね私の絵は。

——最近じゃ津波ですよ。あれには参りましたね。こういう時に描いていて良いのかと思つて三か月くらい絵描けなかった。一水会では色紙を皆に描いてもらつて色紙の売り上げを山田町の教育委員会に送りました。これは良いことしたつて皆で言ったんですけどね。自分は絵を描くしか能がないから絵を描いて、少しでも世の中に役に立つようなことがあればいいと思つているわけです。

——先日新聞に宮崎駿の『風立ちぬ』の広告が載つていて、「堀辰雄と堀越二郎に敬意を表して」とありました。堀と堀越とおおよそ合わない取り合わせです。堀越は零戦の設計者です。どういう物語にするのか興味がありました。僕は堀辰雄好きなんです。堀の事を甘ん

ちよろい文学だとか、歯の浮くようなキザな文章書くとか言つて反対する人が多いんですよ。僕は好きなんです。だつてあの戦争中に生活して小説書きながら全然戦争の事書いてないですよ。自分は恋人を結核で亡くして自分も結核になつちやつて、常に死ぬつていうことに面と向かつてた人ですよ。僕もある時期一回離れた、堀から。ちよつと甘んちよろいなと思つて。

でも最近自分が死ぬ時期が近づいてくると偉い人だつたんじゃないかというふうに思うようになりました。

——零戦。良い戦闘機ですよ。実に形が良いですよ。日本のなんですよあの形。外国にも色んな飛行機ありますが皆美しくない、形が。だけど零戦美しいですよ、日本的な美しさですよ。僕は大好きなの零戦でも零戦がいいかな。僕は美しいなあ……がね。

——アレックス・コルビルという人、日本じゃ知られていないですよ。でも見てね「これだ！」と思つた。僕より十才上ですからもう亡くなつてるんじゃないですか。カナダのノバスコシア州ウルフビルっていうところの大通りを牛を連れて歩く女性とかね、牛乳配達する少年とか自分の町を丹念に描いている。ちよつと写実的でスーパーリアルズムとも似てるし。現代のカナダを描いている。そういうことに感動しましたよ。僕の画集を先生の所へ送ろうと思つて行つたら甥が勝手に電話してアポ取つちやつた。「私一人で女房いないけどそれでも良かったらおいで。」つていう電話で訪ねて行った。画集見て「ビューティフル、アドマイヤー」つて言ってくれた。英語出来ないけどね、僕にも意味判りましたよ、何か良いことらしいんで。

時々私も落ち込むんですよ。ガツクリしてね。そういう時にはコルビル先生の言葉を想い出しては元気を出すんです。

以上

注目の新人②

戸荻 武宏さん



昨年、七十五回記念展で二水会賞を受賞し、二点入選で注目された戸荻武宏さんは東京都八王子市在住で現在四十二歳です。
(聞き手)加曾利光男

——初入選は

六十九回展、七年前で三十六歳の時でした。その後、有島生馬奨励賞、佳作賞を二回頂き、去年が一水会賞でした。

——一水会に応募したキッカケは

三十歳を過ぎて絵描きとしては先が見えないというか、無所属でいることに限界を感じ始めていました。何か掴もうと初めて見に行った公募展が一水会でした。たまたまです。会場で阿佐ヶ谷美術専門学校(以降阿佐美)での先輩、新井隆先生にお会いしました。これも全くの偶然です。それで一度出してみると言われたのがキッカケです。

正直言うと公募展に対してあまりいい印象を抱いていませんでした。実際入つてみて、ほとんど誤解だったことが分かりました。

——そもそも、絵を描き始めたのは

もともと阿佐美のデザイン科を受験しており、入学するまでまともに油絵を描いたことはありません。当初は全くのところ劣等生でした。

当時のカリキュラムは、三年間毎日午前中は裸婦クロッキー、午後は二年生の時は石膏や人物デッサンだけ、二年生からは油絵だけ前期はグレイズ(単色画)、後期も三〜五色での制作

奈良県一水会出品者協会の歩み

1944年(S19) 学徒動員により愛知県軍需工場へ行った5名(辰巳文一、吉本義夫他)により「紅陽会」を結成

(戦後) 奈良師範学校(現・奈良教育大)卒業生で一水会、光風会、独立展等への出品者を中心に、年2回「紅陽会展」を開催し、これが現在の「奈良県一水会出品者展」の前身となる

1971年(S46) 奈良師範学校にて坂元一男先生の指導を受けた卒業生で一水会出品者により「奈良県一水会出品者協会」を創立し第1回展を開催、以降毎年2月頃開催
※第1回展当初は、日頃の勉強成果の発表展として各小品2点程度の出品であった。第5回展では出品者28名、点数52点が並んだ。

2014年(H26) 第43回奈良県一水会出品者展、会員72名、出品点数63点(20号~50号新作各1点)

入会資格:一水会入選をもって入会とみなす
代表:辰巳文一/事務局:河石正義
会場:第1回~16回、第24回~現在は奈良県文化会館、第17回~23回は奈良県女性センター



自然の中に潜む心

第43回

奈良県一水会出品者展

研鑽と成長を支える豊かな土壌

昨年の第七十五回記念一水会展において、奈良県からの出展者は四十五名(委・会員含む)であり、関西においては大阪に次いで活況である。周知の通り日本を代表する文化財と歴史風土に育まれた奈良県において、一水会の写真精神と奈良の文化風土が心地よく合致するからか、県内においても一水会出品者数は他会派に比べ突出している。

本年、第四十三回奈良県一水会出品者展が去る二月十二日~十六日、奈良県文化会館で

別欄にあるように本展の前身である「紅陽会展」を戦後すぐに創立され、現在本展代表

である辰巳文一先生は「良いモチーフを探し、観る者を魅了する画面と迫力、自然の中に潜む心、詩情を爽やかに表せるよう探究していくように」と話され、出品者からは「挑戦的な色と、新しく描き入れたモチーフの表現方法など今後の展開をいつも試作して「いま」との声も。例年千三百名程の来場で賑わう会場では、来場者から「新聞記事を見て来ました。一水会のレベルに期待して、大変見応えのある展覧でした」との嬉しい感想も聞かれた。

現在会員数七十二名

開催され、五十号までの新作六十三点が並んだ。毎年新春の新作出品の機会を、近年は秋の一水会展への実験研鑽の場として意識する者も多く、その姿勢を奨励すべく六年前より号数上限が五十号と大きくなり、出品者の制作意欲を刺激している。その成果として昨年の一水会展において、奈良関係出品者から文部科学大臣賞、損保ジャパン美術財団賞、新人賞、一般佳作賞、七十五回記念賞の受賞者を輩出した。

と一県としては大所帯となったが、一水会本展課題に同じく元気な新人作家の益々の出現が待たれる。新人作家の研鑽と成長を支える豊かな土壌を絶やすことのないよう、まずは今年も新春の新作発表での収穫を、秋の一水会展に向けて昨年以上の成果が得られるよう、日々奈良県の出品者は切磋琢磨している。(弓手記)

自由の色を伝えること」されました。影響を受けた画家、師匠、先輩は好きなのはフェルメールやシャルダンですが、作家としては身近な先生方に影響を受けています。阿佐美でお世話になった中村清治先生の作品とその人となりに強く惹かれました。

——日常の生活は
八王子出身でして、妻と二人暮らしです。阿佐美を卒業した後、二年間は助手として母校に残りました。その後、明星大学で佐々木豊先生の助手を五年ほどしたこともありましたが、三十代半ばまで絵の講師などしていました。今は夜勤のアルバイトをしています。親には長いあいだ心配かけましたが、公募展での受賞や銀座での初個展で少しは安心させられたかなと思っています。今はほぼ無趣味ですが、気分転換には庭いじりなどをします。

一水会選抜展の会期中、日本橋三越でインタビューさせて頂きました。機関紙創刊号の一水会展評で本山唯雄先生に褒めて頂いたのをとても喜んでいました。



「特集」 第11回 一水会精鋭展

三月十日〜十六日、銀座貿易ビル七階の東京銀座画廊美術館にて第十二回一水会精鋭展が開催されました。今年のお出品者は七十四名、カウントされた来場者数は千五百名ほどでした。

陳列を担当して頂きました吉崎道治、田中義昭、さぎやあきららの三先生に講評をお願い致しました。誌面の都合上、半分ほどに割愛させて頂きました。ご了承承お願い致します。

個々の講評に移る前に、いくつか共通する事項がありましたので以下列記します。

- 巧く描こうとか、巧く見せようとしなくて欲しい。
- 明るい暗いではなく、色で見て欲しい。
- 暗いと黒いは違います。
- イロイロ物を入れすぎて絵を弱くしている場合が多い。

永谷光隆 これまでにはなかった遠景に工夫が見られるマチエールのきれいな作品。
平井芳夫 色数を絞って成功している。
戸苅武宏 暖色の扱いがとても美しい、描写力のある作。
村上選 ベテランだけあって色のきれいな手慣れた作品。船のデッサンが曖昧。
滝沢美恵子 意欲的な作品だがもう少し描きこみが欲しい。
市原はるか 透明水彩の美しさが良くできている。ここからどう動くか…。
広瀬範明 明るい色使いが魅力。

横の線の扱いが今一つ。
新井隆 人物は良く描けているのに床の線が曖昧かも…。
久保博隆 丁寧な描けて、黒ずんだ感じがなくなった。
保坂 晶 何か不安を感じさせる魅力的な作。人物や、雲の形と位置に工夫が欲しかった。
土田佳代子 色のバランスが美しい。どこかに彩度をあげた部分が目立った。
伊藤尚尋 緻密に描けているが、岩の色がやや単調。遠景の半島を取り去った方が拡がりがあるのでは…。
芝 教純 ポイントが絞れた佳

作。絵が動き始めた。

宇佐美美美 拡がりを感じられる構図。手前の竹柵はなくてもよかった。

弓手研平 色が冴えてきた。画面下の岩を整理して水を見せたほうが良いと感じられる。

浅見文紀 丹念に描かれている。

冷たい水面をうまく表現しているが、影の色に変化が欲しかった。

平井利明 深い描きこみが魅力的な絵。

近藤孝子 陰影を色で見えるようにして欲しい。手前の絨毯の処理が曖昧。

岡山豊樹 実験する姿勢には好感が持てるが、画面にポイントが欲しい。

小沼秀夫 描写の出来る人。ちょっとモノが多すぎる。

西真里子 色がきれいな。色面分割の工夫が良いがもっと大胆に。「小さい嘘はすぐ見破られるが大

きい嘘は真実になる。」
山本佳子 色のニュアンスが良い。窓や床の線は説明的になら



ぬよう。

加曾利光男 いつもより柔らかく描けて魅力的。画面右半分の整理が必要か…。

杉田公子 カブの赤が生きている。テーブルを画面外まで広げた方がいいかと思う。

斎藤由美子 テーブルの上は良く描かれているが、トルソの処理が説明的。

岡田三千代 画面上半分は質感もあり、とても良い。踏切の板の表現に一工夫欲しい。

武田道弘 色のバランスが良いが、ポイントになる部分に色の

強さが欲しい。

山下審也 色調は整っていて好感は持てるが、どこか色に冴えた部分が欲しい。

児島真澄 上半分区切らないで全部緑のシートにしたら？作者のこれからを見守りたい。

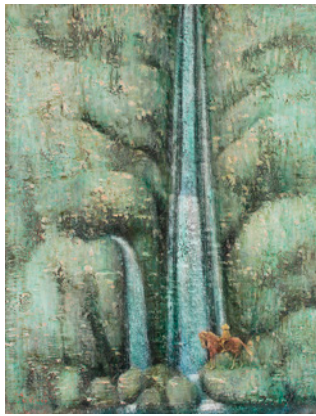
鈴木公子 絵が動き始めた。顔の表情よりからだで語って欲しい。

高木利一 しっかりとした描写。空気感もあり生活感を感じるのが良い。

橋本満弘 リンゴの赤が単調。杭の位置を左にずらして、落ちたリンゴもあったら良かった。



時は流れて… 宇野 のり子



その水は何処から来たのか 弓手 研平



冠雪奥長瀬 浅見 文紀



ナバーラの秋 菊地 洋二



投影された街 加曾利 光男



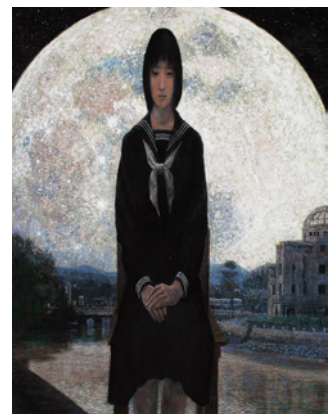
雪国の人 新井 隆



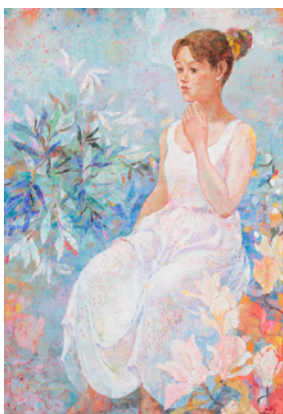
トルソーとバラ 斎藤 由美子



雪上がる 栗原 高光



名前のない月 木村 毅



マグノリア 相馬 順子



冬の贈り物 杉田 公子



悠の音 芝 教純



緑の風 西 真里子



風化 永谷 光隆



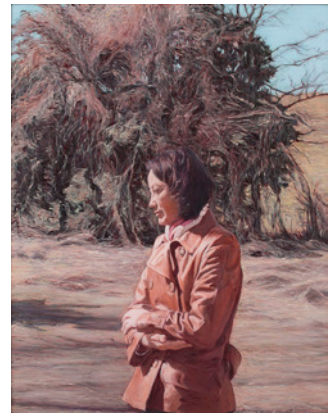
オシャマツの海 高橋 康夫



ドロブグニク 村上 選



映える 三好 典子



冬樹 平井 芳夫



朝風 北澤 廣城



磯の香り 市原 はるか



水場のシリーズ MIDORI 山下 審也



「人と棲家と」 保坂 晶



夜明け前 伊藤 尚尋



河口にて 高木 利一

あのころから

本山唯雄先生訪問インタビュー

聞き手／さきや・新井・西

—このあたり(荒川区・西日暮里)には文士、彫刻家など多く住んでいたとのことですが。

戦前ですね有名な人達が随分集まっていた。戦争で焼けちゃったんですよ、てんでんばらばらになっちゃった。

—幼い頃から絵がお好きだったんですか？

勉強が嫌いだから画用紙に絵を描いているとそれを友達が巧いねえなんて言うんですよ。先生も、これは大人が描いた絵だなあなんて言う。それが間違いのもとでね、プロの絵描きになることは考えもしないし嫌なんだけど周りが言い出してその気になっちゃった。

—芸大の受験は実技もありましたか？

あの時は戦争が終わった年ですからね本格的ですよ。洋画の教授は梅原さんと安井さんでね。募集人員も少なかったですね応募は多かったんだけど定員がね。日本画も油絵も十人くらい。ところが四十、五十のおっさんが

ねどーつと来るんですよ。文部省もこれはいけないと正確に入學試験をぶり返して厳密に本当に実力のある学生をとると言うんで整理しちゃった。その時には僕らも合格できた。

—同期生の中に浮田克躬先生がいらっしやる。

浮田は二つか三つ若かったけど、入學試験を受けて初めて彼と知り合いになった。三栖右嗣も一緒だ、あれはね中学から一緒なんだ中学から美術学校まで。そこで三人組は仲良くなった。それでずうつと来た。そして、二つの教室のどっち行っちゃった言ったら僕は安井教室へ。

—その頃の芸大はどうでした？

あそこはまだ専門学校ですよ、僕らが入ってきてアルバイトしながら絵の勉強しているうちに教授連が変わってね。裕伊之助が助教授で入って、安井先生も辞めて行くわけです。そこで宮本三郎とかそういう次世代の人達が入ってくる。段々改革が進んで本格的な美術学校に。

こっちは、卒業したってどうしようもないからぶらぶらしてたんですよ。それで美術学校に六年ぐらいいたかなあ、いたけどアルバイトで金稼いでいる。それで事務官は、あの学生は(学校を)クビにしよう、僕もクビ

の候補になった。でも教授連が『俺が責任持つ』なんていうことになって、それで助かってね。その時初めて人情っていうこと知った。それでこっちも真剣に絵の具をアルバイトで稼いで買って、学校に今までの倍くらい出席して段々学生らしくなった。

—裕さんが人情をかけて保護してくれた訳ですね。

—卒業される頃の三十二年十八回展が初出品ですが。

あの時代はねえ、教授助教授みんな一水会系なんです。日展系は一人非常勤で来てましたね。教授連中はほとんど出て来ないで助教授あたりが実際に面倒みてくれた。

病氣してね、絵が描けなくなったら一年二年休んでこいよなんていう先生がいる、そういう雰囲気だからまた絵が描きたくなる。何時でも描きたいとき描きなさいよって言われるとかえって一生懸命やる。それは芸術教育の良さだね。だから音楽とはまた違うんだよね、音楽っていうのはもう覚えて行かなきゃならないからね。美術の場合は漫画描いてもこれは芸術だって押し通しちゃう。絵は助教授が柱で



すね、厳しくてね。だから我々が一番怖いのは助教教授。

— 裕先生も助教教授だったんですね。

そう、あの人も厳しい。厳しいけれどもあの人の場合はね筋が通ってるんだな。僕の仲間はみんな四年で卒業している、僕もそのつもりで卒業式になってくると卒業証書もらいに事務局行くわけ。すると事務官が、「あなた全然学校出てきてないのに卒業証書取りには積極的に出てくるというのはどういう訳ですか？」って。「卒業証書は欲しい



んです、幾らかずつ払って滞納分だけ払った時に卒業証書受け取りに来てよろしいでしょうか」

って言ったたら、ああそれでいいですよって言われた。別に卒業証書が欲しい訳じゃないけれど折角みんながもらってるのに僕だけ貰わないのはおかしい、それは金目にはならないけれども額縁に飾って将来結婚して、嫁さんに見せたらこれは一生懸命やったというそんなようなこと思っさせさせさせと勉強したんだ。

— 師の画風を踏襲するのは芳しくないと思いましたが。

ただちよつと僕の絵と似ているから好きだなあと思っただのは裕伊之助先生だったよね、あの先生は言うてることはピンと分かるからね、絵をみると先ず四分か五分位じーつと見るんですよ、眠ってるのかなと思うとそうじゃないんだね。第一声ももう厳しいんだ、でもね当たってるんです。それだけで自分が勉強不足だったことが分かる。だから一番好きだったですよ。

基礎的な力はまず写実すること、その点では裕さんの教え方というのには群を抜いている。安井先生の場合は写実なだけで

あの先生の理論がひとつあつてね、強調してやっていく、自分の気持ち十全に、偏った絵だけれども自分の満足した表現に持つていきたくてというのが安井先生だからね。裕先生の場合は絵というものはしつかりしたものが身に付けられればそれで良いんだ、あとは自分の好きなような表現でも良いんだという、基礎はやっぱりしっかり描けと。

だから基礎は写実ですよ。明るい絵で写実でしかも昔の古臭い写実じゃなくて裕先生の写実を表現したというので僕は心打たれるよね。写実っていうのも色々なやり方があるんだと。自分なりにそういうことを表現したいという気持ちもありましたね。

— 定款に「写実の正道を守り…」とありますが、先生は写実についてどのようにお考えですか？

写実の正道っていうのは物がその通りに描ける、それが写実なんです。存在する物を造形的に逃げないで描くのが基礎で、それがある程度自分のものになつたらあとは自分の表現をどうとん変えていっても良いんだよという方針、だから本格的なんですよ。ただ当たり前に描くことがなかなか難しいです。いわ

ゆる昔のほそーい筆使つて描くっていうのも写実だし、そうじゃない例えばマチスとかね、フランスのああいいうものが写実であるとも言える。多彩だから自分に合ったものを真似ても良いんだよと、でも永久にそれを真似るものじゃなくてそこから自分の段階を作つていけば良い。そういうことです。

— 人物画が描ければ何でも描ける、特に手の表情を描ければと。

写実の勉強の段階では一番難しいのは人物だと。だから人物は描くの嫌いだつて言う人もいるけども、嫌いでも良いから一回そこを通過して人物っていうのはこういうもので描いて行つたらいいんだつていうことを。人物画の中に色々な要素があつてそれを経験することによって自分も新しい道が開けるかもしれない。人間で一番難しいのはこの「手」。顔はね関節が無いんですよ。頭蓋骨はあるけれども。手というのは各指が五本あるでしよ片手になるとものすごい関節がある。その上に筋肉が巻き付いているそれが人間の基礎になるんだと。だから手がしっかり描ければ放ついても顔はしっかり描ける。これが僕の理

論なんです。

関節があるし骨格があるし顔の表情がある、ちよつと顔の表情を変えると全体が変わつてくるといふかそういう機能性もある…それをよく勉強したら将来人物を描かなくても風景でも静物でも或いは想像上の新しい絵画をやるうという時に、強力な力を与えられると。

— 要素が多いっていうことですね。

そう、だから造形の秘密が全部人間の体に埋まってるんだ。力のある人はそれを自分で掘り出してくる、みんな気が付かなかったそこにそういうものがあったのを掘り出してくる、その掘り出す力を養うのが教育なんです。一着手つとり早いのは裸体ですよ、裸になると皆同じなんです、同じなんだけれど皆違うわけで関節も太さとか骨とか筋肉の付き具合とかましてや顔なんかね、同じ目玉なんだけれどその大きさとか配置そういうのが全部違つてくるから似ないとか似るとかになつてくる。非常に難しいテーマだけれどもそれを克服できなくても勉強したことが何か有意義になる。一水会というところは写実の

勉強するところ、でもみんな顔の表情を問題にするんですよ。けれども一番大事なところは骨格。足とか指は関節の集合体ですよね、これによって喜怒哀楽も表現できる。顔っていうのは眼口鼻によって十人百人の表情が違うんだからそれが一番大事で、手というのは五本の指を描けばいいんだらうって言うてるのは逆で、五本の指をしつかり描くことは、関節がたくさん集まっている集合体の指を描けるということ、難物がそこに埋まっているんだから、指が描ければ他は全部描ける。顔っていうのは眼鼻口があつてそれをしつかり描ければ似てくるんですよ。そういうこと言うよね、何だか絵の勉強ではなく解剖学の勉強かと思つちゃうんだよね、そう言われてもしようがないんだよ。

たものです。誇張して描くのがなくて正常にしつかり描いていながらそこにその人らしい味が出たり、全部関節を描ききつた上でそれを自分なりに崩したりなんかするっていうそういう力の遊びみたいなね、そういう人は数は少ないけれど何人かいるんだよね。人物画っていうよりも人間っていうこの二本の足と二本の手で動く素晴らしい動物がいて、それを顔で表したり手や足で表したりするっていうことが、いかに大事であつていかに難しいかつていうことを若い人には伝えて、人物を描くの嫌だもつと自由にやりたいという人もいるけどもその嫌な課程を短時間でもいいから乗り切ってくれと、そうすると十年二十年三十年先にそれが生きてくる。

— 先生のお作品について何か仰つて下さい。

僕はね、自分の弱点を知っているんです。文学性に入っていないんですよ。これはね画家としては非常に困る傾向なんです、造形性が弱体化して行くわけよ。だからなるべくその文学性を自分から排除すると、排除できなかったら自分の美術に対するパーセンテージは半分くらい下がってくる。本格的に描くっていうことは造形性なものであつてねそれが情緒的に流れていくと、つまらないものになっちゃうんだよね。だからつて基本的にもつと造形的に描けるかつていうと、それは才能だからね。

— モチーフは普段の生活の中から見つけるのですか？

そうですね。今ね上野公園描いているんですよ、ところがこれどこ描いたか分かるかつて言ったら分からない、みんな。というのはあそこ材木を撤去したり植えたりして昔のイメージとは全然違うわけ。それがおもしろいんで描くんですけど。でも僕は本質的にはあれは同じだという、本質では。だから僕は例えば昔の上野公園であつてそれが未だに続いていたらそれでも良かったし、今の改造した上野公園があるいは想像で描いたとしても、とにかく写真とそれ以外のものが入り込むんですよ、これが困るんだ、そこに文学性が入ってくるんですよ。これが文学性でなくて造形性を持つていきたいんだけどもね、未熟なんだよね。時間をもっとかけたいんだけどね、僕は絵の描く時間が長すぎるからここが災いしている



んだなあ。例えば一年に一点、百号一点を徹底的に描いてやれば一番いいなあと思うんだがそんなことやつていたので商売成り立たないからね。でも描いている時は楽しいですよ。旅行して気に入ったところを描くでしょ、それは正確にその通り描く。だけどそれを今度ばかり帰つてきて絵にしようといふときにそれじゃあ満足できない。それを土台にして自分で作っちゃう、半分ぐらい作っちゃうんですよ。だからなるべく画題には特定の地名を書かないようにやるんだけどね。だけど

ねえ、地名の中に何か絵のイメージが入り込んでやうんですよね、それが文学性になっちゃう。そうすると識者からあなたたちよつと純粹的な絵画に専念した方がいいよつてなこと言われる。ああそうかつて非常に今それ反省している。だから僕のやっている絵は本当は造形力の弱い人間が考えることであつて、そういうことを乗り越えたときに僕の

絵が完成するかもしれないとは思うんだけどね、難しいねえ。
 —制作の行程はどのようにされるのですか？
 カンバスを素地として塗るけれどもあとにはもう絵を描き始めるわけだから絵の具体的な形は出てくるわけ、それは途中どんどん変わるかもしれないけれどもそういうことで徹底的に抽象



化しないように心がけてやつていくんですよね、やつていくと言うよりももう僕の気持ちの中には一般的な写実というか通俗的なね、ああいうのは排除していきたくていう気持ちがありますよ。じゃあどういふものかつていうとそれは分からない。例えば女性描くにしても、絵画的な顔というのは美人じゃなくていいんですよ。でもそれは一般の大衆には受け入れられない。だから僕は美人を描くんじやなくて造形的に理想的な人物画はたまたま美人画に近寄ることとはありますよと、それくらいの許しを乞う。一水会には美人画を描く人多いんだけどね、いわゆる一般的な美人、あれと絵画でいう美人画とは違うんですよ。絵画的な美人、それは非常に難しい。技術がないとできないしね。それは美人ではないけれど嫌な顔ではなくて、みんなの心を迷わす動かすというそういう美人画。美人じゃなくて美人画をね、描ければなあ。

—風景をみても女性を見ても静物を見ても絵画にするために、絵画に変えていかなければならぬといふことですね。
 風景をみても女性を見ても静物を見ても絵画にするために、絵画に変えていかなければならぬといふことですね。
 —それを本画に移る前にデッサンを通して進めていくわけですか、本画のときには構想はおおよそ出ていますか？
 いや出ていない。天才だよ出ていけばね。だからいいよ描いてみてデフォルメしたりなんかして結局はまずい、妙に合つてないような女の顔になるんだよね。でもそれでしょうがないのね、美人つて名前をつけないきゃいいわけだから。

—風景画についてはいかがでしょうか。
 風景というのはみんなが見てああ素晴らしい場所だなあとと思うような風景と、そうじゃなくてこんな風景もあつたのかというような風景もあるしね。実在からそういうの引き出すわけだからその時にこれは誰が見てもあそこの風景なんだ、でもこんな風景はないけども良い絵だなあという、そういうの描きたいね。安井先生の場合はかなりデフォルメするんだけども実在の場所へ行つてみるとそつくりな雰囲気が出てくる、これが本当だなあとつてね。全然場所無視して描いちゃつてこれ見て誰もあそこの場所だと思わないよ、うな、そういう風景は描いてな

い。描く以上はどんなに造形的に変えても誰が見てもこれはあそこの場所だという風な説得力のあるのが力だと思ふ。でも一水会の場合はそんなにひねつたような表現はしないからね、誰が見てもああこれは私がどこか行つたときに見たあの風景だと素直に、この素直に見られるつていうことは悪いことじゃないですよ。悪いことじゃないんですよ。けれどもそれを乗り越える努力のテーマとしては大変な貴重なテーマ。ただそれを意識しているか、していないかの問題であつて意識してもうまく行かない人は将来を約束できると思うんだけれど、そうじゃなくて自分で描いた絵にうつとりして自己満足するような画家はいらないと思ふな。

—写実ということの本質みたいなことですね。
 当たり前な顔を描いた、その当たり前の中にその人でなければ描けない特異なものが匂うような、これは難しいけどね。一水会の創立者の中で偉い先生の中にやっぱりそういう人が何人かいたんですよ。良い意味の癖。だから才能のない人は癖が本當に癖になつちやつて上に上げられ

ないね。だからやはりその上の先生がそういうことを巧く柔らかく指導するっていうのは難しいけど必要ですねえ。

— 滲み出てくるような感じですか？

写実だからそんなに變形することもないけどね。一般の人も、絵を良く知っている人が見てもまあいいなあと思う絵というのが描きたいねえ。こういうのが描けたら素晴らしいと思うよ、通俗でありながらそれが非常に絵画として訴えてくる。通俗っていうのは良くないって言うんじゃないかな。通俗っていうのは多くの人が理解できる絵であって、しかもそれが非常に個性的であるというように絵が生まれたり素晴らしいと思うね。

— 先生のこれから目指されることは今仰ったような方向でいいでしょうか？

そんな力ないよ。ただ写実だからね、存在するもの風景でも静物でも人物でもそういうものをそんなに大きく變形する、變形していくっていうことはできないね。だから難しいんですよ。ふつうに描いていながらそこにみんなの気持ちをえぐるような

ものを出すっていうのがね。かえって變形した方が易しいんですよ。でもそれは僕自身はやらない。

— 變形させずに有るがままの現実に寄り添い、平明さを保ちながら独自の見方で表す。

そうそう、變形の大前提の中には人間の存在の色んなものを全部否定するんじゃないかってそれを巧く利用するのが大変なんですよね。だから失敗する例が八十%あるんじゃないかな。で反省したって巧くならないんだからね、これはしょうがない。運命だから。

— 画家は一生涯試作、実験の繰り返しだと仰ったことがあります。その中で強い、心を抉るような仕事をなさってきたことを感じますけれども。

そんな、感じないでくださいよ。僕はね、ごまかしごまかしでやってるんだ。あのね、一水会っていうのはある限界があつてね、人物でも風景でもそこから逃れられないんだけれども、逃れないところで何か自分のものを出そうっていうのは大変な難しい世界なんだね。だから一水会の出品者の絵がみんな同じ

一人の人物が描いたような絵になっちゃうでしょ。そこから抜け出すのはいかに難しいか、そういう認識を持つているかどうか、本当ならそこに技術が伴ってくる。むしろ抽象でもなんでも前衛的な美術団体の方の作家の方が気楽なんですよ。基本は否定するんだから、自分が基本なんだから。そこは一水会はないからね。一水会は基本的にはちゃんとするよね、根本的な物の足で地上に立っているわけだからそこから抜け出さないでそれをやろうとする、これは大変なものです難しいです。

僕は思うんだけどね、人物の勉強する時に、絵画的な顔を描く講習会を作ったらどうかと。絵画的な顔っていうのは美人画じゃなくて絵画的な美人画ですよ。絵画としての美人、そういうものの確立を一水会したらいいと思うんだけどねえ。

— 川口市の中学校の跡地で教室を一室借りることにしましたので、人物画の講習もしたいですね。ただ写して綺麗に描くのではなく絵画としての美人画をどう自覚し描くかという点で、それはやはり基礎力、基礎力

をある程度持つていないとね、途中で瓦解する。

— 若いに越したことはないのですが、四十、五十歳で一水会出す人もいます。

そういう人はね、楽しんで描くのもひとつの絵の功德ですからね。そういう人も人なりに褒めれば自信が付いてくる。喜びを感じる。ただ人物、風景、静物とあるけど一番難しいのは人物だからね。その一番難しい人物にあなた方は挑戦しているんですよという前提を教えて、そこからやっていけば多少は自信持つんじゃないかな。下手でもあなたの良いところはここににあるんだとかね。

— 教える側にも眼が必要ですね。

もちろんそう。そこが難しい。ただ一番解りやすいのは写真でね、目の前にある物をその通りに描くと。その通りに描ければいいんだそこから行く。その通りにも描けない人がデフォルメしたってしようがない。

— 今年日展をお辞めになりましたが、これからは発表の場を一水会一本にされるのですか？

日展もねえ一水会の出品者は

結構みんなすっかりやっていますよ。ああいうのどんどん増やしていったらいいね。

— 今後は一水会専属でよろしくご指導下さい。今日は先生のお人柄に触れたような気がします。絵でお考えになつていられることも良く解りました。

人柄って言われたら、僕はね、あまり信頼しない方がいいよ。どんどん変わるんだから。

— でも変わらないものがあるんですよ。

あんの？ 教えて欲しいな。

以上
「あのころこれから」



砂丘に魅せられ

神奈川県・宇佐美 明美

私が砂丘に出かけるようになりしたのは、およそ二十年前のことです。爾来、砂丘の魅力にとり憑かれています。

砂丘は、砂と風が織りなす造形ですが、これに光と雲の演出が加わりますと、千変万化のドラマが展開されます。ある時は、清澄な空気に安らぎを感じ、ある時は、吹き荒れる風の音に、強い孤独感に襲われます。砂丘の魅力の主役は、何といっても、風が砂の表面に造り出す風紋です。朝夕の、太陽の低い時刻には、光と影の対比が顕著になり、美しさが倍加します。これからも、様々に変化

する様に、私は魅了され続けることになるでしょう。画家として、大自然が作り出す造形に接して、私の心に湧きでる感興を、絵の中に描きとどめ、皆さまに伝える努力を続けて参ります。

今後目指したいこと

山形県・遠藤 博政

一水会新鋭展を初めて鑑賞できたのは第九回展でした。会場を二巡して感じたのは表現と再現の違いです。会場に展示された一点一点はモダンで独自性があり、モチーフ、作風、技法などが一体となつて作品に込めた作者の「想い」が伝わってきて、見応えがありました。一方、自作は込めた筈の「想い」は余りに希薄でモチ

ーフの再現であり、単に説明図だったことに気付かされ、愕然としました。作者の「想い」が表現されてこそ初めて画面になることを教えられました。

それから一年半経過した昨年九月の一水会展で「二十一世紀に於ける選択」と題し、一水会が今後めざすべき新たな方向が掲げられ、それを探り実現していくための場として、機関紙「一水会」が昨年末に発刊されました。これを期に、今後は単なる再現だけの図面ではなく、表現の域に少しでも迫って画面になることを目指していきたいと強く念じております。

オホーツク斜面から

北海道・勝谷 明男

今年一月、もと一水会会員の鷺見憲治先生(九十四歳)が亡くなりました。

昭和十五年、弱冠二十歳の先生は文化果つる僻地北見に、画友とはからい「凍影社」を創立。北見に於ける初の絵画展であり、後年中学、高校時代、我々は大きい刺激を受けた。更に三十

六年、オホーツク圏内を網羅する公募団体「オホーツク美術協会」を我々有志三十九名を巻き込み立ち上げた。先生の姿勢は、後輩を育てるといよりは仲間として切磋琢磨するという感じだった。先生には物心両面でも我々を支えて頂き、昨年は五十回記念展を迎えた。また四十四年にこの会の北見在住主要メンバー七名を集め「group斜面」結成。会則は「月例展とし第一日曜を例会及び展示日とする」。

嘗々と毎月続けてきた展覧会は昨年五百回を迎え、百号前後の新作を一人数点ずつ並べ記念展開催。先生の笑顔が印象的だった。

更に昨年は北見から三名が一水会展に初出品、初入選した。遠い札幌、小樽等から見ればまだまだ少ない絵画人口だが、広大な道内に散在する一水会出品者が、何らかの形で連携できれば、と思う。

機関紙「一水会」 発刊に寄せて

兵庫県・清代 晃子

去年の秋、上野の東京都

美術館で七十五回記念展が、開催されました。新しくなった会場は、地下一階のスペースを横へ移動するのみで全作品を観て廻れるので有難い。又、先生方や出品者の方々と、ごあいさつする機会も増えたように感じた。七十五回記念展を機に創刊された機関紙「一水会」は心のどこかで今迄待ち望んでいたような想いで、手に取って改めて一水会にもこのような機関紙が欲しかったと思った。

紙上での小川游先生のアトリエ訪問は普段お聞き出来ない事もあり良かったです。

先生のアトリエの横は武蔵の森が残り、日の光を遮る大木が茂り、足元は落葉でフワフワして、昔の風情が今に残る一角にある。今後ますますお元気で御活躍下さり、一水会を発展へと導いて下さることを期待し、拙い文作ら一筆ペンを取らせて頂きました。

展覧会雑感

茨城県・北澤 廣城

一水会に出品しはじめて

からもうかれこれ二十数年の歳月が流れた。学生の頃、公募展での活躍を夢見て、そこで認めてもらえることがステータスと考え、こぞつて美大の仲間達と競うように公募展に出品した。そして、そこで先生方にご指導頂きながら自分の作品を磨き、自分の中の詩を詠い、また「精神性を表出することこそ純粹美術の醍醐味」と友人と語り合ったことがとても懐かしい。

近年、そんな公募展への出品が減ってきているように感じる。若者の公募展はなれが進んでいることはなんともし寂しさを感じる。また、ポストモダンニズムの流れからか作風の大胆さや構図のおもしろさには目を見張るものがあるが、本来芸術作品のもつ永遠性や詩情、精神性の追求がおざなりになつてきているように感じるのは、私だけだろうか。これからの美術界がどのように進んでいくのかじっくり見つめながら、自分の作品作りを進めていきたいと思う。

水路

自由投稿欄

揮毫 浅見嘉正



スケッチ会

広島県・木村毅

昨年、少し寒さが気になり始める頃、広島では久保田先生を中心とするグループ、「路展」の十五名でスケッチ会を行った。この行事は、毎年、懇親を兼ねて一泊二泊、気候のいい春と秋に行う。今回は、広島県の東



部、福山市鞆町を訪れた。鞆は、古い町並みの残る港町である。あの坂本龍馬が蒸気船いろは丸で航海中、事故のため滞在し、そのときに潜んだ部屋が残されている。というような所だから、映画のロケ地として昔からよく使われている。最近では、「崖の上のポニョ」である。モチーフとしては、風情のある路地、漁港など事欠かない。そんな風景を前にして無心にスケッチブックに向かっていると肩は凝るが爽快である。出品を前に大作を描く時と違って、つい邪念が入って道に迷うということがない。夜、寛いだ格好で宿の一室に集まり、スケッチを見せ合ってもらい、構図だの色だのはさっておき、皆さんの雑念のない

スケッチが清々しい。それが私には一番の収穫である。

スケッチと私

広島県・久保田 辰男

私がスケッチを意識したのは次のようなことが始まりである。

五十余年前、初めて画材店に行った時のことである。老店主から「君もいい絵が描きたいのなら、まずはスケッチを重ねることだね。そしてそのスケッチの厚さが君の身の丈を越すくらい描き続けるといい絵が描けるようになるよ」との言葉をいただいた。油絵の具セットを初めて購入し浮き足立っている自分に大きな指針をいただいたのである。油絵制作にあたって、ややもするとスケッチ等資料不足にもかかわらず、しやにむに絵筆を握っていることがあり、深く反省している。



近年、やっとスケッチをする事の楽しさ、面白さが味わえるようになってきた。肩の力を抜き、モチーフとじっくりと対話できる幸せをしみじみ感じるようになった。今は亡き老店主の言葉をかみしめながら日常的にスケッチを今後も更に続けていきたい。

愛知県・公文典子

今回、初入選しました愛知県の公文典子です。

幼少の頃から自然の中で育ってきたからか、未知の世界を想像すると心の底からモワモワと湧き出てくるものがあり、この気持ちに動かされ日々過ごしているように思えます。この気持ちは私の原動力でもありません。これまで空からダイビングしたり、空と海のオーロラを見たくて極北の地へ行ったり、深海へ潜ったり、探究心そのまま自然の中に身を置いてきました。そんな私と絵との出会いは、20mの大きな絵を描くイベントのお手伝いをさせて頂いた四年前の事です。その時

感じた底知れぬワクワク感の中で「夢を追い続けて、経験して行く人生がいい！」と強く思いました。大好きな探検家で技術者でもある西堀榮三郎さんの「石橋を叩けば渡れない」とにかく、やってみなはれ」と言う言葉に背中を押されこの世界に飛び込みました。絵が好きという気持ちを力にして楽しみます。これが次に繋がって行くと信じて大切に一步を踏み出してみます。

群馬県・黒澤馨

早く始めるぞ！」と決意しますが、これを二十五年余り繰り返してきました。きっとこれが定年まで続くのだろうと思います。学校では教師として、自分が一水会展に関わることで、図工や美術が好きなきどもをたくさん育てたいと思っています。最近、制作者としての想いが浮かびました。それは、毎日会っている子どもたちを自分の作品に取り入れてみたいということですね。仕事と制作の両立は簡単ではありませんが、これからも頑張りたいと思います。

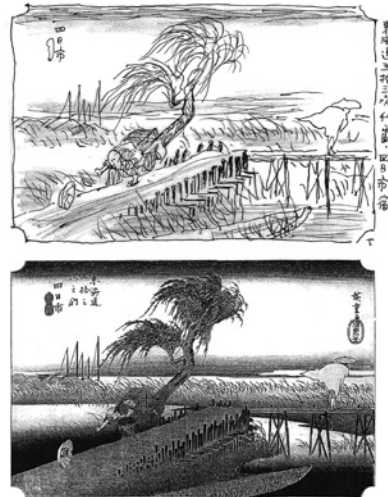
制作にあたっての悩みは誰にでもあると思います。私の場合は「制作時間の足りなさ」です。私は教員といつても小学校なので、中学や高校とはちよつと違います。空き時間や放課後に自分の絵を描くなんてことはできません。自分の作品について集中して考えたり描いたりできるのは、一年を通して夏休みの数日間だけです。「今年も出品無理かも」と何度も思いながら、ギリギリまで頑張つてやっと出しています。「来年こそ

富山県・芝教純

何をどう描くかと考えると当然前者のほうがでしょう。描き方は技術ですから向上心を持って取り組めば、そのうちに身に付くものと思っていました。書うはいきませんでした。書における臨書、木炭のデッサンの意味はそこなのでしよう。自分は一水会展を技術研鑽の機会と思つています。風景、静物、人物の順に

…。基本的には描きたいものを、出来るだけ多種類、だから静物画が多くなりました。今その頃の作品を見ると、詰めめが甘さが目立ち後悔ばかりです。ここ数年は人に興味がいき、本展の絵はもっぱら人物です。話を初めに戻します。これから先の人生を考えると方法ばかりを言っている暇はもうないな、とすると考えたら眼に見えるものを使ってそこを超える、あるいは具体的なモチーフを写実的に描くことの意味、限界、いろいろ悩むこの頃です。明らかに言えることは自分がまだまだ発展途上、以前の作品からは自分の粗し（あら）かみえてこないからです。

山形県・真木恒夫



「二十世紀に於ける選択」の一項には、やや危惧の念を覚えます。この方針により、抽象的傾向の作品が評価面でも数の上でも上位を占めるようになった場合、ほかの団体との違いが曖昧になり、一水会としての独自性が失われてしまわ

構図を学ばなら
浮世絵を見よ!

K・T

ないかということですが。私としてはやはり二項の写実主義を信じ、一水一石の描写の先にあるものを探り、精神性のある表現を求めていきたいと思えます。大作の制作はほとんどが屋内での作業となりますので、私のように風景をモチーフとする者は、自然の持つ真実―気を見失わないよう自戒が必要と思っております。

私はこの頃こんなフレーズを地元の教室で放言しています。広重の東海道五十三次の四十四番の宿場「四日市」(左図)は、数ある浮世絵の

たよりも代表的な傑作です。構図に欠かせない広がり、奥行き、動き、そして何よりもパッションがあります。三重川とは今の三滝川、三度笠の旅人が渡っている板橋は現在、三滝橋と名付けて国道一号線に並行しています。構図上の傑作選では他に「庄野白雨」や「大はしあたけの夕立」(江戸百景)などもあ

りまじょう。厳格な構成と安定した絵画空間こそが構図の本道とされている

たヨーロッパの芸術が、その転換期(十九世紀)に入り新しいものの見方、新しい手法で構成された日本の浮世絵に接し、そのダイナミックな絵画表現にビックリ仰天、ジャポニズム旋風を巻き起こして熱狂的に迎えられることは、今さらながら頷けますね。

神奈川県・宮原麗子

せきすいかい
第29回 尺水会展

〈会 期〉
平成26年7月18日(金)～23日(水)

〈会 場〉
山形県芸文美術館
第1ギャラリー

山形市七日町2-7-10 ナナ・ビーンズ(5F)

〈出品予定者〉
岩淵伸平 遠藤博政 大場文雄 工藤道汪
高橋巨志 坪井 徹 寺沢勝義 橋本満弘
星川 學 真木恒夫 吉田輝夫 (以上、11名)

〈出品点数〉
1人3点(合わせて300号程度/人)

『水路』に『投稿下やい』

投稿についてのお約束

自由投稿欄『水路』は、一水会構成員(全出品者)が紙面上で自由に意見を交換できるページです。みなさまが制作にあたって日頃考えていることや疑問、制作上の技術情報、地域での一水会関連のグループ展情報や展覧会評、作家論、一水会に対する質問、そして機関紙『水会』の読後のご感想などが、ご随意にご意見をお寄せ下さい。『水路』のページが、機関紙上で委員、会員、会友などの区別なく自由で活発な意見交換の場となり、やがて騒々しい写実論議のルツボとなればうれしいです。カットやオモシロ写真も募集いたします。

『水路』を拓くのは、あなたです。楽しいご投稿をお待ちしております。

■原稿：ハガキ一枚。カラーでも良いです。 ※お送りいただいた原稿は原則としてお返ししませんので大切な物についてはコピーをお送り下さい。

①ペンネーム希望の方も原稿をお送りいただく際には、住所、氏名を明記のうえご投稿下さい。

②四〇〇字以内を目安にご投稿下さい。必要によりこちらで添削することがあります。(やむを得ず字数が大きく超える場合は、ご相談下さい。)

③楽しいカットや写真も募集(一人二点以内)。カットは白黒で、ハガキの大きさ位のものでお願いいたします。(返却の必要がある場合は、その旨お書き下さい)

④お送りいただいた原稿は原則としてお返ししません。(大切なものについてはコピーをお送り下さい。)

⑤個展の情報については、こちらで検討させていただきます。

あなたの『水路』で紙面を飾ろう!

「水路」では水路の絵を募集します。

平成25年度 石川県一水会出品者協会の活動

出品者協会総会

事業報告・計画・会計・役員・会則などの審議
3月17日/出席者70名

石川県現代美術展(総合美術展 4月~5月)

出品作品研究会/2月・3月(2回)/参加者合計130名

スケッチバス1泊2日

浅間山(佐久、小諸方面)/参加者34名

一水会出品者協会研究会

7月・8月(2回)/参加者130名

一水会展出品共同搬入作業

9月3日/参加者20名

スケッチバス日帰り

10月21日/上高地/参加者35名

一水会金沢展対策臨時総会

11月10日/出品者80名

第75回記念一水会展金沢展

講演会

協会新年会(授賞、推挙者お祝い会併催)

2月9日/出席者60名

以上の事業推進のための役員会

4役・幹事・担当者/年10~15回開催



い。 (杉村記)

県民に愛されて

第75回記念

一水会金沢展

記念講演に感動

第七十五回記念一水会金沢展が昨年の十二月十八日から二十四日まで金沢市21世紀美術館で開催された。一水会展からの百五十七点と石川の遺作二点の計百五十九点が陳列された。六日間

の入場者は年の瀬にもかかわらず九千九百九十三を数えた。会場の一階に基本作品と主な受賞作品が並び、特に目をひいたのは入口の壁面に掲示した「一水会二十

であった。地下会場には受賞作品の一部と地元作家の作品が並び、恒例事業の「小品チャリティコーナー」も賑わいを見せた。作品の陳列指導にいられた田中義昭運営委員、久保田辰男運営委員の両先生にいろいろな

変遷、そしてご苦勞など、七十名の聴講生に感動を与える素晴らしい講演であった。同席の久保田先生からもお話を聞き中味の濃い美術の時間が流れた。金沢の地で一水会を開催したのは一九五八年で、以来五十五

心から感謝して居ります。小林哲夫さんが、作品搬入後、倉庫の中の床に座り、加筆していた姿は実に思い出深い。今年私の午年。こけな

郎(岸田劉生に師事・春陽会)は昭和初期フランス留学後、石井柏亭の勧めで一水会展出品、一水会優賞、日展出品後、五十八歳で死去。現在(二〇一四年三月)長野県岡谷市立美術館考古館で親子三代四人展、母娘二人展等々、企画されている。川島立美術館で開催され、

作品を通してふるさとの昔の天竜河岸風景の美しさを偲び、出来る限り参加、協力したいと思う。

古代仏教文化の粋を感じ取るご縁をいただきました。見事な仏像の数々を拝観する中で出会った「中今」という言葉が心に残っています。

私たちはこの方針の中、自由に、厳しく自身の制作を究めてゆくこととなります。先人が築き上げた「中今」の精神で、第七十五回一水会展は盛会のうちに閉展しました。これからも多くの市民の皆さんに楽しんで

「中今」を生きる

石川県・山本勇

過去から遠い未来に至る間としての現在、という意味

とであらねばなるまい」との方針を打ち出しました。私

もりたいと願っています。

一水会事務局だより

**空き教室の利用を開始しましたので、
ふるってご利用下さい。**

元・川口市立芝園中学校の空き教室が四月から利用できるようになりました。

したら事務局までご連絡下さいませようお願い申し上げます。

利用についての 申し合わせ事項

一水会が使う教室は様々な事情により当初予定されていた二教室から情報室(冷暖房完備)の一教室となりましたが、普通教室よりかなり広い部屋ですので、団体での勉強会から小さなサークル活動まで便利に利用していただけます。

アクセスは京浜東北線蔵駅西口から約八百mと近いので徒歩で通えます。また駐車スペースにも十分な余裕がありますので、皆さん、奮ってご利用下さい。

◆利用の申し込みは事務局(山本)まで。
☎〇四八(八二六)八八〇五
携帯〇八〇(二一六八)七一五六

教室で利用できる物を 寄贈してください

すでに寄贈の申し出があった石膏像やイーゼルの搬入は進めておりませんが、さらに道具等、教室で使用できる物があります。

◆利用希望日については申し出順を優先する。(事情により変更をお願いすることもある。)

◆利用責任者は熊谷さんから鍵をもらい、終了時には熊谷さんに返却する。(予定)

◆サークル関係での利用、会議等の利用も出来る。

◆利用時間は原則として午前九時～午後七時とする。

◆日常の利用者は教室の光熱費など活動維持のため、一回につき左記の利用料を負担する。

サークル及び個人は午前九時～十二時(二千元) / 午後一時～四時(二千元) / 午前九時～午後七時(二千元)

※団体については別途、取り決める。

◆危険物は持ち込まない。

◆教室の消灯、エアコンの管理、戸締り、清掃などの後始末は利用者が責任をもって行う。

◆利用当日の責任者を明確にする。

※不明の件は事務局の山本にお問い合わせ下さい。

最近の動静

【逝去】古屋五男氏(会友)・宮西良子氏(会友)
【休会】相馬貞夫氏(会友)・水野光美氏(会友)

第七十六回 一水会展 九月十八日～十月三日 於／東京都美術館

東京都美術館ロビー階第一、二、三展示室にて開催します。昨年は全国応募作品中四百八十九点が入選し、委員、会員を合わせ六百三十五点が展示されました。入場者総数は一万五千三百五十六人。一日平均約千百人の方に観ていただきました。このあと「第七十六回一水会展」の運営委員、常任委員、委員、本年度受賞者作品は、三都市で開催される展覧会を巡回します。

【大阪展】 十一月十一日～十六日 於／大阪市立美術館

【名古屋展】 十二月二日～七日 於／愛知県美術館ギャラリー A～G

【金沢展】 十二月十七日～二十一日 於／金沢21世紀美術館

この他、各地方において一水会のメンバーによる展覧会が予定されており、活発な活動が展開されていきます。毎年、それぞれの地域の皆様が積極的な取り組みをしている嬉しい報告が事務局に届きます。

編集後記

朝日の記事には静観の構え。ものごころ付いた頃から目にし、五十年以上契約し続けてきた朝日新聞の購読をやめた。記事内容に対する私のささやかな反抗。訪問インタビュー記事の掲載量は紙面の都合上、取材収録総量の半分以下。こぼれ話にも宝あり。いつか全内容を小冊子にまとめてみたい。

第二号は創刊号より楽かな? と思っていました。ところが、そうでもなく、紙面作りにルーチンはありませんでした。今号から自由投稿欄「水路」が始まりました。それぞれの声が集まって、力強く流れ出し、皆様の心に届きますようお願いいたします。

今回は一水会の創

